

「リンチ」と題された桜井孝身の絵だ。コロナ禍で休館する前の2月半ばに福岡市美術館の収蔵品展で見た。この作品をはじめ、黒々とした絵が7点並んだその一角は、明らかに周囲とは異質のエネルギーを放っていた。

黒いアスファルトに赤い埴輪のような焼き物を無数に貼り付けた菊畑茂久馬「葬送曲 no.2」。青緑の銅板を貼って人型とし、周囲の石膏が砂漠を思わせる山内重太郎「アルジェリアの男」。

極め付きは尾花成春の「自画像」。板に盛り上げたアスファルトの凹凸だけで、目鼻や髪を表現する。黒光りする顔はまるで炭鉱労働者のようだ。

「描いている絵はそれぞれ違うが、黒いからすぐわかるでしょ」と学芸員の山口洋三。アスファルトは初期九州派のトレードマーク。0年代末の展覧会場でも「目立った。すぐにわかった」とメンバーの一人、田部光子は振り返る。

60年前後の福岡市内はまだデコボコ道が多く、そこら中で舗装工事をしていた。アスファルトピッチは「一塊が100円。安かった」と田部。貧しい若手画家にとって油絵の具は高かった。

七輪にのせた鉄鍋でアスファルトをどろどろに溶かす。もくもくと黒煙があがる中、ひしゃくでベニヤ板に流す。大きなサイズもいっぺんで埋まる。しかも「表面張力が出て面白い。偶然に凹凸のある分厚い画面ができる。アンフォルメル（非定形）ですよ」と田部。

熱いアスファルトは「優秀な接着剤にもなる」（田部）。金属片、陶器、段ボール、プラスチック、ロープ、チューブ、布…。何でも貼り付ける。田部は「繁殖する」で竹のホウキの柄を輪切りにして、びっしりと貼った。

アスファルトを最初に使ったのはオチオサムだ。福岡の印刷会社に勤めるオチが作業工程のなかで、見いだした。感光剤を塗ったガラス板を、硝酸銀を入れたアスファルトの桶で洗浄する。その廃液の美しさに魅せられた。

56年に桜井とオチが出会い、2人を核に九州派が形成されていくうちに、誰もがアスファルトで描き始めた。そこに様々な日用品や廃品を貼り付けて「ナマの生活を絵画に提示した」と前衛美術研究家の黒ダライ児は語る。「オチは表現的に強い素材と考えた。さらに桜井は素材も思想たりうると考えた」

桜井の長男で画家の桜井共和は父の言葉を思い出す。「九州派は『派』じゃなくて『素材』だ。『思想』じゃなくて『モノ』だ」。全てが素材になりうるという考えは、同時代のニューヨークの前衛芸術運動ネオダダに通じる。

制作現場の光景はさながらハプニングだった。高温のアスファルトの猛烈な臭気の中で「パンツ一枚になって頑張った。お祭りみたいなもの。見物人がたかっていた」

と菊畑は回想する。「あれは自分たちのコミュニケーションやったね」「もはや戦後ではない」と経済白書が書いたのは56年。50年代後半は日本が高度成長に突き進んだ時代とされる。ところが東京から遠く離れた九州の一角、福岡の世相はいささか違った。

戦後の転換期暴れ出す生活者

石炭から石油へのエネルギー転換に伴い、筑豊や大牟田の炭鉱に合理化の波が押し寄せていた。労働争議が激化。総資本対総労働といわれた59年の三池争議でピークを迎える。鉄道、百貨店、新聞社でもストやロックアウトが頻発。56年に水俣病が公式確認されるなど公害問題もここ九州から広がった。

騒然としていた。60年安保という政治闘争は東京も同じだが、福岡はもっと根っこにある経済構造の部分で、いまだ戦後の転換期の渦中にあつた。

そして九州派に集った画家たちは、この町で働く一介の生活者だった。

桜井と俣野衛は西日本新聞社、石橋泰幸は西日本鉄道、田部と八柄雄高は岩田屋百貨店に勤務。菊畑は岩田屋の楽焼コーナーで皿に似顔絵を描いていた。他のメンバーも大半が学校の教員などの月給取りだ。「親の脛かじりは一人もいなかった」（菊畑「反芸術縮談」）。桜井は校閲部で赤鉛筆を握る傍ら、新聞社が支局との通信用に使う伝書パトの世話もしていて、ハト舎のある屋上はメンバーのたまり場となった。

地元には美術大学はなく、美術の専門教育を受けた者はほとんどいない。美術館も画廊もないから、画家になるには公募団体の重鎮に師事し、公募展で入選を重ねるしかない。そんな閉塞状況に飽き足りず、新しい動きをつくろうと暴れ出したのが九州派だった。

発端は「天才」オチだ。オチは55年に佐賀の高校を卒業後、印刷工となり、職場で海外雑誌「ヴォーグ」を見る。そこに載っていたジャクソンポロックの絵を見て「これなら俺でも描ける」と思った。そうして描いた2点が同年秋の二科展（東京都美術館）に入選する。しかも岡本太郎が選んだ前衛的作品を集めた第九室に展示された。

この絵を見た桜井は衝撃を受ける。オチが福岡在住とは知らなかった。翌6年夏に初めて会った2人はグループ結成に動く。西日本新聞の労働組合の闘士である桜井は「オーガナイザー」の能力を発揮し、仲間を増やす。

56年の独立展に初入選した菊畑も「来いや」と声をかけられた。画布をキャンバスから外し、くるくる巻いて西鉄電車に乗り、二日市の桜井宅へ。桜井、オチ、石橋らに絵を見せる。86年刊の「反芸術縮談」には、みなにゲラゲラ笑われて批判されたと

書いた菊想だが、3月に会った時の述懐は違った。「貼ってみせたら、オーッと声があがったあんまりバカにされんやった」

「良いとか悪いとか互いに評価しあう。上下関係はない。そんな場は当時あり得なかった。絵で自分をつくろうとしていた私のような青年がつかまってしまうのは当たり前だった」。3歳で父を、6歳で母を亡くして孤児となり、後に俳優になる同級生の米倉斉加年の家などに寄宿し、働きながら一人で絵を描いてきた。そんな菊畑の本音だろう。

57年8月、九州派旗揚げ。11月の野外展ではメンバーが「Q」と書いた麻袋を着て、石油缶をたたき、街宣パレードした。この時の写真を見ると、中洲の橋の上に白衣の傷痍軍人が募金箱をもって立っている。そんな時代だ。

「ちゃんとした社会人が、あんなアホなことをたびたび平気でやっていたんだからほんとに呆れかえる。チンドン屋をやったり、街の真ん中で相撲大会をやったりしながら、翌日は平然と勤めに行ってたんだから、これは相当にオカシすぎる。きっとこれは『九州派』だけのせいではない。世の中が『九州派』だったのだ」（「反芸術縮談」）

古賀重樹

KEYWORD アンフォルメル

第2次世界大戦後に欧州で起こった「非定形」を志向する前衛芸術運動。物質感の強い絵肌や力動感あふれる筆触を特徴とする。J・フォートリエ、J・デュビュッフェらを先駆とし、G...マチュー、JP・リオペルらが代表作家。米国のアクションペインティングとも呼応し、1950年代の美術界を席卷した。中心人物の評論家ミシェル・タピエは57年来日、具体美術協会を世界に紹介した。